

### 季節の花を思い出の着物で スケッチする。西 育代さん(穴虫)

桜ヶ丘の静かなお家を訪ねると、入口の踏み石に歓迎の言葉が各国の言語で刻まれていました。庭いっばいに咲く春の花々が、西さんご夫婦とともに私たちを笑顔で迎えてくれました。

「今日はこのヤブツバキの花でみなさんをお迎えしたかったのです」と、西育代さんは玄関に飾られた本物の花と額装の布絵の両方を指さされます。

布絵とは、西さんがおっしゃっている名称で、布を貼り付け、縫いつけて絵柄を描くもの。しかし、アップリケというよりも、写実性も強く、もつと絵画に近いようですよ。

「最初は母の形見の着物を何とか残したい、ということから思いついて始めたのです。母の着物ですから、この柄はいつ頃のもの、この色はどんな時に着ていたか、という思い出がいっぱいあって、とても懐かしいの。」

西さんは、布絵を始めたのは、香芝での公民館活動、婦人学級で陶芸・絵画・切り絵の講座を受けたことが、端緒になったとおっしゃられます。

「布絵を始めて、しばらくして奈良県の県展工芸部門に出品

したのです。ドクダミの絵でしたが、入選しました。認められたことが嬉しくて、七年前のことです。それから毎年出品して、平成八年に奈良市長賞を受賞しました。『マワリの絵』です。」

西さんの布絵の題材は、ほとんどが花々や野菜などの日常の中にみられるものばかり。そんな所に、主婦らしさ、女性ならではのセンスが感じられます。

「素材の着物は作品が展示されたりするので、皆さんが家にある必要になった着物類を持ってきて下さります。それに題材は庭に咲く季節季節の花や料理に使う身近なお野菜です。」

現在、西さんには三名の生徒さんがいるが、ご本人は教えるなんてとんでもない、一緒に楽しんでいられるだけとおっしゃる。

「一昨年はこれまでの作品五十点を並べた個展をふたかみ文化センターで開かせていただきましたので、この秋には四人一緒に作品展を、と思っています。でも、こうやって好きな作品に打ち込めるのも、すべて主人の援助があるからです。だからとても感謝しています。」

「ちょっと、仕事がお休みで家

に居られたご主人の幹雄さんに、コーヒーをご馳走していただきました。中国からの留学生の里

親を引き受けておられる二人には、庭の花々のように爽やかな雰囲気は漂っていました。

